

拝啓「おふくろ」様

あなたが今を少しでも楽しみながら暮らしてくれるのが、あなたの息子としての私の心の救いです。

気がつけば、あなたの息子として生まれて、51年が過ぎて行きました。いろいろなことがありましたが、あなたの息子として生まれてきて本当によかったと思っています。

流れ流れの左官屋の4人兄弟の末っ子として生まれて、おやじの仕事に家族がついていくように転々としながら育った小さい頃、結局は最後に現在もあなたが住んでいる今の京都に落ち着きました。が、私は思っています。私のふる里はあなたです。あなた自身がつる里です。あなたがいる所、住んでいる所、そこが私のふる里です。

あなたにくる時がきて、あなたの愛したおやじのもとに、あなたが旅立っていくとき、それは私からふる里がなくなるときだと思っっています。そして今度は、妻とともに私自身がふる里になるときだと思っっています。私たちの間に生まれてきた子どもたちのために、私たち自身がふる里になるときだと思っっています。

恥ずかしい話ですが、私はこの年になってもまだ、あなたの四

人の子供どもを育ててきた、あの大きな胸の感触を忘れていません。そして、あなたの股の間にいつも足を入れて寝ていた、あなたのその温かさも忘れていません。

恥ずかしい話と書きましたが、本当はそのことをちっとも恥ずかしいと思っていない。むしろ、この年になっても忘れていないことに誇りを持っています。もう照れくささが先にたち、あなたの前ではやさしそうな顔やそぶりや言葉もかけませんが、私からすれば、あなたと私を結んでいるそれは、切っても切れない大きな絆です。

あなたを想えば、いろんなことが頭をよぎります。そしてすべての頭をよぎることが、この年になって分かってくるのです。が、これまた、あなたと私を結んでいる切っても切れない大きな絆になっていることを知ります。

ゆとりのない生活の、お互いゆとりのない心から、おやじとたびたび夫婦ゲンカをし、まだ小さかった私の手をひっぱって寒空の下に飛び出していったこと。行くあてもなく結局真っ暗な神社の境内で私を抱いて寝ようとしたこと。私の震える体をじかに感じ、「俊や、ごめん」と言いながらおやじのもとに帰っていつ

たこと。私が自転車で命を落とさんばかりの事故に会い、通りがかりのタクシーの運転手さんに自宅まで運んでもらい、そして寝かしてもらっていたとき、そのことを聞きつけたあなたが、パーの仕事先から血相を変えて「俊や、大丈夫か！」と天まで届きそうな声で私のもとに飛んで帰ってきてくれたこと。私が「歳の時におやじが死に、そしてまだ息子たちの世話になりたくない、あなたが病院のヘルパーの仕事をしだしたとき、用事があって立ち寄った私とバッタリその病院のロビーで出くわし、そしてその時、持っていたシビンをなにげなく隠そうとしたこと。私がこの業界に入るため東京に行くことを、しかもその旅立つ前日にあなたに、まだ3歳にもなっていないのにたばこを吸いながら打ちあけたとき、となりの部屋から灰皿を持ってきてくれた、あなたのその手がぶるぶると震えていたこと。そして「本気か」と私に聞き、私が「本気だよ。真剣だよ」と答えると、言い出したら絶対に聞かない私の性格を見越して、「おまえの気の済むまでやってこい」と気丈な顔をして言ってくれたこと。そして次の日、家族に見送られながら、成功するまで絶対この家には帰ってこれないと思っていた私に、それを見越してか、「俊ちゃん、だめだった

らすぐ帰ってきていや。あんたがだめでも、だれもなにも言わへんよ。恥ずかしいことでもなんでもないよ。だめだったら帰ってきてよ。ればいいんやからね。みんな両手を広げて待ってるから、堂々と帰ってきていや。これは、おかちゃんと約束してね」と、まるで拜むように、頼むように私に言ってくれたこと・・・」

そのすべてに、私の母としての立派で切ないほどの愛情があり、そして自分が大人になっていくにつれ、母親を悲しませたり泣かしたりすることだけはしたくないと思う私の心の、大きな動機になっていたような気がします。決して余裕のある家庭ではありませんが、愛情の多さと絆の堅さだけは、立派に胸を張れるぐらい素敵で、お互いを思いやる家族だったとおもいます。そして、その中心にあなたがいつもいたような気がします。

私があなたに思い切り泣かされてしまったのは、私の結婚式のときのことでした。4人兄弟の末っ子で、上の3人まではおやじも生きており、両親そろってという形で子どもたちの旅立ちを親としてサポートしながら見送ることができたのですが、私のときはもうおやじはいなく、女親としてなにもしてあげれないという気持ち、以前からあなたにはあったのでしょう。「おまえが結

婚するときはおかちゃん、100万円やるつもりや。それしかできなけれどそれを受け取ってくれ」とよく私に口癖のように言っていました。それを言い出した頃は、私もタレントとして世の中に出ていましたし、自立もしていましたし、家族の金銭的な援助を得て結婚しようなんて、これっぽっちも思っていないませんでしたから、「そんな金はいらん。自分のことは自分でやる。経済的にも余裕ができてきたし、心配することはない。そういう金があるんだったら、自分のために持っておけ」と私は本気で、怒るようにあなたに言っていました。実際、年老いた母親の年金を貯めたようなお金を、私は逆立ちしてももらえないんじゃないと思っていました。

そして目が回るような、胃が痛くなるような結婚式の準備期間を経て、おやじさん（ハナ肇）の仲人で無事結婚式を終え、京都の実家のほうからもあなたを筆頭に、私としてはできる限りの親族関係を呼び、人生のハレの姿をみんなに見せることができました。

そしてそのすべての一段落がつき、ホッと一息ついた頃、その日は妻も実家のほうに帰っていませんでしたが、私はみんなな

らいただいた御祝儀をあらためて確認するために、自宅の居間にそれを持ち出したのです。そして、その中にまぎれ込むようにしてあった、あなたの御祝儀袋を見つけたのです。そして、そのあなたの御祝儀袋をよく見てみると、他の人たちの御祝儀袋とその厚さが少し違うのに私は気づいたのです。

イヤな予感のようなものが私の心に走りましました。おそろおそろ中を開けてみると、私のその予感通り、明らかに金額の違う1万円札の束が出てきたのです。

私はあっけにとられるような、考え込んでしまうような、複雑な気分にとさらされてしまいました。1万円札の束が何枚あるかは私には数えなくても分かっていました。しばらく私とその1万円札の束の間に言葉にならない妙な空気が流れていました。そして気がつけば、涙が出ていたのです。ぼろぼろ出ていたのです。声にならない声をあげながら私は泣いていたのです。まるで子どもの頃に戻ったように泣いていたのです。「おかちゃん、こんなにいらんのにー」と大きな声で叫びたくなるような気持ちの中で泣いていたのです。あなたが私に口癖のように以前から言っていた言葉を思い出しながら、泣いていたのです。

そして、その涙の中で私は思ったのです。あなたには今までい
ろんなことを教わってきましたが、あの年になってまたあらため
て教わりました。それは私の心の中でうすうすキレ事として感じ
ていたことなのですが、あらためて身にしみて実感として教わり
ました。それは、お金というものにはいろんな意味合いのお金が
あるということです。お金は単なる単位や通貨ではなく、人間が
使うお金には気持ちというものがあるということです。そして、
どうせお金を使うなら、そういう気持ちのこめられたお金の使い
方をしなければということです。

私はその涙の中で、目の前にあるあなたのこの百万円をありが
たくいただくこうと思いました。あなたの、たぶん年金を長い年月
をかけて貯めただろうと思われるこの100万円を、ありがたくい
ただこうと思いました。あなたの私を思う気持ちや思い入れがこ
もったこのお金を逆に返してしまうことは、あなたに失礼だと思
いました。それは単なるお金を返すことではなく、あなたの気持
ちとその思い入れを返してしまうことだと思います。親子とい
う関係を結んでいるあなたに、「気持ちだけもらっておく」とい
う言葉は絶対に通じないと思いました。あなたの気性、性格すべ

てを知っている私は、このお金を素直に心から受け取ることがいちばんだと思いました・・・。

拝啓、「おふくろ」様。あなたは私に本当にいろんなことを教えてくれました。そして、月日が流れた今、私にとってあなたはいちばん気になっていいる存在の一人です。あなたは、間違はなく余生というものを送る時期にさしかかり、そしてその時間どう考えてももうあまり多くないと思われれます。

あなたの子どもとして、今は本当に好きなことをして暮らしてほしいと思っています。耐えたり、忍んだり、がまんしたり、そんなことの繰り返しのような人生だっただけに、今は好きなようにさせてあげたいと思っています。そして息子として、たとえそれが目先のことであっても、それをいつも提供してあげたいと思っています。

あなたは現在61歳。もう十分に生きてきました。すべての子供の行く末を見、孫を見、ひ孫まで見、自分の子どもたちの家を泊まり歩いたり、みんな温泉に行ったり、あなたはあなたの愛した親父の分までしっかり生きてきたような気がします。そういう部分では、あなたにくる時がきても、見送る人間として、心残りはい

とつもありません。たぶん、あなたのほうもそうだろうと思いません。私にはなぜかそれが分かります。

今私があなたに関して一番気にかけていることは、あなたの息子としてあなたの最期だけは、しっかりと見届けてやることです。それがあなたへの最後の最後の孝行だと考えています。天国で待っているあなたの愛したおやじと、あなたより先に逝ってしまつた次男のもとへしっかりと見送つてやることが、あなたへの最後の最後の孝行だと思っています。

拝啓、「おふくろ」様。これからはどうか、なにも心配しないでください。あなたのすべてのことに関しては、長男と私ですっかりと見守つてやります。そして、そのすべてに失礼のないように、あなたの人生にけじめをつけてやります。あなたという人生の最後の文章の句読点は、あなたの残した私たち家族で、しっかりとつけさしてもらいます。

拝啓「おふくろ」様。どうか今は、本当にあなたの好きなように暮らしてください。あなたが今を少しでも楽しみながら暮らしてくれるのが、あなたの息子としての私の心の救いです……。

拝啓、おふくろ様……

三男 俊郎より